


 益田市長  
山本 浩章

大相撲の土俵の上を見上げると、吊り天井となつています。その四隅からは大きな房がぶら下がつており、それぞれ色が着いています。すなわち、東は青、南は赤、西は白、北は黒です。

これは「四神」という四つの方角それぞれの守護神とされる動物の色であり、さらに四季とも対応しています。東は龍で春、南は雀で夏、西は虎で秋、北は「武」という想像上の動物で冬となっています。(もつとも、「武」だけが想像上の動物というわけではなく、龍にしても赤い雀にしても実在しませんが)

四神のうち春と関連する龍は、時には徳の高い帝王の象徴、時には恵みの雨をもたらす水神と、とても縁起の良い動物とされます。普段は池の中に棲む蛟うづもと呼ばれる小動物ですが、時勢に乗ると巨大な龍となり、雲を呼んで天高く昇ります。(このと

き起こるのがあの「竜巻」ということと)

古代中国漢王朝の初代皇帝となつた劉邦は、元来家柄も教養もなく、武勇ではライバルの項羽こううにからきし歯が立ちませんでした。しかし、高い鼻に美しいヒゲといった龍にも似た堂々たる人相と途方もなく大きな度量を持つており、そのたぐい稀な魅力によって最後に天下を勝ち取りました。以来「龍顔」は皇帝の顔の別称となつたのです。

西洋にもドラゴンという想像上の動物がいるのは奇遇といえます。こちらも鱗に覆われた爬虫類らしき全身に加え、鋭い牙と爪を持ち、さらに空を飛ぶことができるなど、多くの共通点があります。ただし、おめでたいどころか、しばしば災いをもたらす悪魔の使いとされるところは龍とは正反対です。『エルマーのぼうけん』という童話において、主人公の少年によくなく、おとなしくて憎めないキャラクターとして登場するのは微笑ましい例外といえます。

この春は、萩・石見空港にとつて、東京線2往復運航が継続する新たな節目でもあります。様々な取組が龍頭蛇尾とならぬよう、ドラゴンのように青空に翼を広げ、確かな上昇気流に乗りたいたいと思います。

## 中世益田講座 我ら、益田氏家臣団！編 (全12回)

### 第11回 内田氏・俣賀氏(中)

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎31-0623



上俣賀氏のものと思われる宝篋印塔  
(供養のために建てられた塔)

※平成28年7月号の(上)より続く  
内田氏は本拠が遠江国内田庄うちだ(静岡県菊川市)であつたため、当主はそちらにいて、豊田郷こう(横田町・梅月町・本俣賀町・左ヶ山町)は代官を派遣して治めていました。ところが、南北朝の内乱が起これると、豊田郷を一族である上俣賀氏に脅かされたため、豊田郷に本拠を移します。こうして、内田氏の一族は、内田氏と下俣賀氏しもまたがが北朝方、上俣賀氏は南朝方として抗争することとなります。

須子に進出したことにより、高津川の水運に関わるようになったと思われ、高津川右岸に拠点を持つ下俣賀氏、安富氏やすとみ、内田氏は利害を共有しており、ともに北朝方に属しました。

一方、上俣賀氏は横田から梅月、俣賀、多田を経由して益田に至る街道を押さえており、内田・下俣賀氏との対立の中で南朝方に属したと思われず。

南北朝の内乱は北朝方の優位のうちに終焉を迎えますが、この頃には高津川左岸の飯田・虫追に益田氏が拠点を獲得しています。益田庄を本拠とする益田氏は高津川の出口にあたる飯田などを押さえることで、高津川下流域の長野庄ながのしやうにも次第に影響力を持ち始めます。